景清外傳

三編

一

ヘ 13
2891
11

2891

景清外傳

一名 松の操

蜂山翁戲編 耕文堂
歌川國直画 平川館合梓

昭和三九

東京都立中央図書館蔵

衆走岸少仍意偽心
蓮山悠之為流
剛士酬恩地度馬羊
衣嫌漆塗槁

右清人計東詩也爰人所贈一
日閱之時書肆耕文堂采乞景
清外傳第三編序辭更沈嗟之
夫景清者平氏世臣也源賴朝
滅平族景清欲為主家復讐苦
身焦志狙賴朝昔趙襄子殺智
伯其臣豫讓欲為之報仇吞炭
漆身窺襄子嗚呼忠臣之所為
和漢古今同日談也予日者嘗
戲編景清傳逮題其序得豫讓
橋詩可謂奇也故換序言以此
詩

文化丁丑亥月絳山樊夫題

烱如一段清水
出萬壑置在
迎風寒露之
王壺

小豆
戸平次

壯志性剛
決大中見
石裂
文覺

忠光
夜叉御前

景清外傳松の操三編

目次

○巻之一

第十九回　姿を窶して妻子面染らず　トを卜して翁聟奇偶を

○巻之二

第廿回　雇夫勇を示して醉狂を挫く　知臣謀を施して刺客を退を

第廿一回　錦袍を刺て忠良志を呆を　教訓を遺して貞婦貞を含むを

○巻之三

第廿二回　皷者の奸計善良を禍を　小女苦心亜父を救

○巻之四

第廿三回　賢吏明断邪曲を正を　奸夫非を悔て善良を帰を

第廿四回　衡を試て忠臣幼君を託を　宿を宅て孝女故主を逢ふ

○巻之五

第廿五回　宿怨の謀を誚て姪女を失ふ　毘嚢の音を導れて父親を得る

自前編至三編　通計廿五回

景清外傳第二編

大意

本田次郎近經伊場の十三が情ふよう。病愈て鎌倉ゆ下る。主と妻と
ふ再會し。再び故の臣となりしを。說話の始とし。惡七兵衛景清
不思議ふ命をぐらんて出門を出て東國ふ赴んとする途ふ。長車
の浦ふ奇夢を見復讐の志を勵し。鎌倉をさして下る途ふ。遠江の
國矢洲川ふて十三阿古屋母子ふ會ふ。其當時六波羅より。討ふの人
數對ふ。本田次郎が情ふて危きを免し。景清ハ東國の方ふ走
る。人ハ四方ふ逃失ふ。人九擒とありて六波羅ふ送ふ。兩嘖ふ。人
を畠山が明斷ふよりて無念ふ下る。宮中ふ琴を彈一件。景清
尾張國熱田の內海の旅宿ふ十三五十奈ふ還會。宿の主戶平次が

賊心を謀んとて景清十三形を換へ途を差へて走ふ。戶平次契
謀ふ中ふ。其尾谷四郎ふ捉へられ獄ふ擊たしを。妻小雪これを
嘆きくるふ。不國にて十三ふ會ふ。十三其貞心を感ずるあまり。英金沢
を立て戶平次を援ける。且五十奈が妹比佐女といふの天性婦邪ある
ものあるが。梶永ふ思られて大姫君の給仕とありしふ姫君失ひて。永
福寺ふ葬まつる。其墓ふ詣ふるの折ふ。賤機阿古屋人九
とこれも永福寺ふ詣でくるふ。不意ふ遭ふ。比佐女ハ緣て梶永ふ
畠山ふ仇なんと思ひ居し所ふ。賤機ハ畠山の命等。本田次郎
妻なり。狂ふ拓きるものあれば。よき幸の時あり。とさ及でもあき
るまくふ道理をけて賤機を寬罪ふ。ときんとする時ふ五十奈
十三阿古屋を尋ね。孫彌兵衛ふ下り。契所へ來かり。契所を見て五十奈

怒り比佐女を殺し遂ゆまで甚多も自害する〜ばかり。更且景清
ハ馬籠峯の山神廟ゆ不図首級を拾ひ〜ゞ其るまり惹出し。初土
こ兄とゆ還會主君より恵丸の。釵を賜ひ複讐の。志氣まもく
堅ゆし。秩をかぢ鎌倉へ下んともる途ゆ〜て。妖僧覺ゆ化まるを見る
まで。十回より十八回ゆ度迄景清〜ゆ説出す。

景清外傳松の操三編卷之一

東都　絳山　戲編

第十九回

妻子面流らぎ
窶を窄〜と
トをとゆて翁　奇偶をも
歳寒〜して松柏の凋ゆ後るを知。國家亡びて忠臣見る。さ〜も
盛なり〜平家。おゝくの西海の波ゆ没し。普代恩顧の者も。
忽ち心を変じて。源家ゆ膝行せんとを願ひ。手便を索て
多くゆ諂ひ。甚〜きハ主を賣て。身の安きを求めける。人の心ハ
村鳥の。栗ゆをきまと稗ゆつくいと浅猿〜き事あり。
ゆ上紙の七兵衛景清ハ。獨心を動ゝさぎ。人臣の道を失ゆ

忠と百折千磨ふ身を苦しめ。君の爲ふ頼朝を討得んりの
をと心を決。妻子をもて〜なく單身。孫倉ふ赴んと。木曽路を
さして急ぐ處ふ不圖して幼主と兄とふ。馬籠峯ふ〜と
環會互ふ心底を傾け。復讎の支を相議す。袂を分て東國ふ
急ぐ途ふて妖僧ふ逢。其幻術ふ騙られ。越國ふ赴ある嵐の
澤ふ誘引。無念の支ふ想ひ〜。彼妖僧を何者ぞと。尋問まれ
ばとれもまつと。敵のを〜の木曽の殘黨。覺明法師ふあん〜〜うば。
怒。弥增接討ふ斬んとまれば。とい奈何。嵐と化〜て失ける。嗟
嘆。として驚きう。暫時結ゝ居たりしが。再び出て来ざり〜うば。
斯て少果〜と殺と殺。心を勵まし途を索め。東國の方ふ赴き
るふ日數を經て今ハそや。孫倉ふ踵す着るれば。敵の隙を

窺んと。滋く忍びて頼朝をたけ。彼方ふハ。木曽の殘
黨。平家の余類。所〜ふ忍びて窺ふよし。其聞あり〜わどふ。嚴
ふとれを守り。堅の油斷もせざり〜しうば。忍び寄べき便宜ふく空
しハ月日を過しけう。然るふ文治四年の春の頃。孫倉大倉
の卿ある。永福寺の伽藍再興あり〜と。畠山庄司重忠奉行と
して。修造の事始あり。斯れが大工左官。石切。木挽。都て造營の
支ふ關る。諸職人を。諸國より召集めるふ景清此支を聞て。こ
宜機會あり。我職人ふ打扮て。造營の場ふ入こと。隙を窺ひ頼
朝の。頭を取て年頃の。恨を晴さんものをと喜び。其手便を索
るが。さるふても敵も〜。我を景清と知らば本意を遂る
とハおきて。あへなく共身を失まんそも〜奈何〜とう宜んと。

多〻工夫を凝らし〻るが。晋の豫讓が古夏を思ひ。更の鱗を眼ふ入て。眇眼の真似を〻。髪ををしゞめ衣服まで昔ふ変る職人ふ。其身を窄〻得られども。尚も人の見咎かと。覚束ふく思ひ〻。ゞ試ふ人豆麦き。雀岡の八幡ふ。参詣をとをる〻ふける。茲ふ伊場十三ふ五十奈を具〻て阿古屋母子の安否を知んと。鍋倉ふくゞり。永福寺ふ詣〻ふ不意阿古屋親子ふ環會て嬉〻中と思〻ふ甲斐も情ふ〻。五十奈比佐女諸共ふ。おへふく自害を〻〻ふるわどふ。罪科我身ふ〻かゝるべゝ〻を畠山有重が情の戴許ふ免るのゝ。阿古屋人丸をさゝ伴ふいもるふ及び〻ゞ前の嘆きをこれふ慰ゝ二人を倶〻て永福寺を出ることふ出ふれと。鍋倉中を追拂ふる。身とふりつゝれば此地方ふ。足を止べき方もふく

我ふもあ〻で大磯ふて。快〻として出ふる。此所ハ京鍋倉の彈路ふて。往還旅人も多ふる此里ふハ倡家あり。其頃名たゝる虎此將ふんど。ゝふ此地方ふ居るふれば。鍋倉の若殿ゝ〻ふ通ひ恋〻られば。聞〻ふ増さし繁昌ふり。十三ハ此地の光景を。熟〻と見て想ふ。阿古屋も我も鍋倉ふ。住家索んとする事ハ必竟景清ふ逢ん為ふり。然るふ鍋倉の地を離れ遠き所ふ居んと其詮さらふ。あゝ〻も。此所ハ鍋倉ふ近く。殊ふ繁花の地ふ。あれば。忍びて鍋倉ふ行ふ。〻〻景清が風声を聞ふ。其便あるべゝれば。旁もて然るべ〻と思へば其所這所心をけ。歩める路の傍ふ。いと大きやかなる倡家ふて。何やらん騒ぎ〻れば。さ〻〻覗きて窺ふふ。主とおぼし〻き漢ふの。一人の娼妓を

の〜罵るを其側ふ妻と見くし。二十ぢうの女房の。多〜和解て居たりける。懇〜とこれを見るふ。漢子ハ則戸平次ゐて。ふ雪さん、居たりしぐこ。悪〜き人ふこそ見つけられ。さんとまを。小雪ゐ〜これを見て。慌忙く走り出。とい弥らしの恩人よ。よくも此所ふ来させ。暫時待せ。くよ。十三の大人よ。〜と。呼ぶ。むるふ詮かさ。く。十三殿を顧て。爾宣ふハ小雪ハ前ゐと。云ふいふも爾えべりぬ。まづ〜這裡ふ入らせ。と。強ちふ誘引が。辞がさくて妹と姪を。伴ひて家裡ふ入れば。小雪ハ喜び前ふ進み自ら草鞋の紐を解き足を洗ひ一室ふ請ひ。さてゆ出ゐれ。殿の恩ハ東間も忘ゐ隙ハなべら伝ひ行衛の知れされが。心ふ想ふのみふ〜て。兎や角心を煩ゐ〜。其甲斐ありて不意今日見へまい〜きとこれふ過たる喜びあり。前の年賜ひゐる。黄金をもて夫戸平次を爾〜ゐ〜て救ひ出し家ふ還り待ひたれども。尾張の住居も影向とゐ大磯へ移り住。今斯安く居るゐハ。ひとへふ殿の賜ゐ。今ハ我夫戸平次も昔の心懇〜ノ奈何〜て逢まいら〜。前の恩を露わども報んものをと朝夕ふ。語り出〜てゐふ。対面ゐさ〜ゐハ伝と。赤心ふくて語るゐぞ。十二いま。此地ふ住んとまれば。とハ車ひの支ゐりと心裡ふ喜びきれば。此言語ふ出ひて頼ゐ。完糸と笑て云りゐハ。某が姑息の仁いゐで爾ハ礼を関へまい。戸平次命助ても志気を改まハ今日の恵ゐきふ逮んや。あんミら夫婦過失をあらため。忠心を尽〜べ。皇天景福を下〜ゐ。日出ゐき家

といあり。ほるをふらんと。語ふくちふ主人戸平次一室の裡より走出前刻より此所ふ居ものふをいぶかる人と思ひしふ再生の恩人よ。某鉦ハて人を知らむ。斯る賢者を家回ろ。仇せしとの方見名れそを悪しとハおぼしまろで。我危急の厄難をさらひもくる鴻恩ハ須臾滄海ふ増てぬれば。せめて九牛が一毫も。此恩を報ひ奉らむ。くに去向を捜索ろど。何所ふおはすをを知ら。心ふ想ふのこふして何とせんぞ。ろーもまく。今日まで過しまぐ。しふ不意今夜しも我家ふさらせまふと日頃の念の届ふやあ。あ嬉しのことかふやよふ雪よ。えまろしまれば阿古屋也前ふ幼稚人さん。倶しとろろせまひぬるふさとそ悩ましくおはすめを湯れ。ぬまろして。何まれ物をまろしまと。置まで云罵て

猶之発ぎて。歎待わぞ十三ハ戸平次が。忠かふ例名ふ心程とれを不審むろしふ似げあきぞ。ろふ人も斯まで愛まろ。ひろ今我此所ふ住居。索んと思ふ時あれば。彼が言語ふもぐり寄て。此地ふ足をとどめぬ。戸平次夫婦が云ふまろし。暫時滞留せんことを頼ミ阿古屋母子ぞ身のうくよう。我上のまを語ま例人我兄弟ハ兎まれ角まれ人丸を人がましく。あさんと思んが繁花ある。孫倉近きふ居るとれハ自ら其便宜を得んと妹も我も思ひさぐまぶ。此所ふ住所を索んと欲ま昔の好身を思ひまろぶ我為ふとれを計まくと。頼むふ小雪いろち笑ひ。こいとより易きあん事あり。奴家さふ来まるる。久しかく絲ど。繁昌の。地方のあくひ古老より。銭あるをを重んぞれば。あんミの恵ミふ今ハ斯此を易

過てぐりはられば人の用ひもおやかさあるべぞ。我家ふ親しき人とくば邑人も兼略せざぞ生営も易くくぐらん。明日ふもあれ宜空房の。近き邊とふゆく贖ひてまゐらまぐし。心易くおぞせよと妻ぞ云へば夫も共ふ頼母しきるりをゆるみぞ。十三阿古屋ハ安堵して。此家ふ居るるり五七日あり。小雪ハ真實ぞふ十三ふが住べき家を捜索しるがとふ此彈路の外まふさ空房の空房のありるを索出してこれを贖ひ十三阿古屋人丸の三人を彼所ふ移らして。何らとあく心をつけて生営するべきるをりをふ十三深く感謝をし。其云ふまるしるる。然るにも景清が去向を捜索るをべ明さぞ蜜ふこれを尋ねとも兎角孫倉ふ入こもぐい此所る做ぐるもあし。爾ハあき其身孫倉を明白ふ徘徊ぞ且戸平次夫婦の子まく不審をこを思ひ獨心を悩しるが。此とあるひ出しるハ今孫倉繁花と又ど。ぞト巫ハ此あるべし我其道を安しくハ心得ばれば此るして孫倉ふ立入んと深編笠ふ面を弊し。鶴岡の八幡の社地ふ立てト占をるふ其頃かなくらまてハ陰陽師あどつふハ安ふして。下賤のものハこれふるり平日の茶話ふもこれをのく預して居ぞし時あれば十三此所ふ出る日より。糸詣の人ハさらふもこれぞ別件人なるくれ我もくと會ひ来て望る我身のく或ハ失りの待人あるとおのがふ多くのる問ハ人のひきも絶ぞ競ひて占をこひるるぞ不屆錢財を獲て三人の口腹を賑ふ尚余をある生営あり。阿古屋もあり恐びるふ孫倉を徘徊夫の音問を捜索るる却説景清多

鶴岡ふ詣で下向の折ゝら不意。段蔓の邊ふて。妻の阿古屋ひを
めゐる人丸を倶しゝて来まるふ。間ゐくも行逢たり。あゐ方見ゝ
と思ひしゝが。避べき方もゐきまゝ。何氣ゐく行過るふ阿古屋を
容貌の変しふ景清ゐりと露知ら給ど。さもゞ年頃相馴ゝ。
我夫のゐまれば何とゐふ其容貌の。似つゝへよと幾回ふり
顧ま。ど敗眼ふしていゐも賤しき漢子ゐれば只これ夫ゐ似たる
人よと。心ふ念じて行過ぎゝ。景清ハ阿古屋が躰を窺ひ省ふ
数年頃艱苦を経ゝとおゞしくて。憔悴ふ羸瘦て古の風姿
ゐ似るべくも。愛惜と思ふ人丸の。手を携へて市女笠ふ人目を忍
おもゝちゐり。これをゐるよりゐゐ便ゐや。彼老朽ゝ身ゐゝ給ば他
夫ふ相馴ゐば。斯浅猿しき光景ふ今落ハさもゝきふ出ゐき

殺ふ貞操をたて世のたゞぎすぬも影護草ふも木ふも心をおき
くの苦難ふ面瘦て憂身とゐゝ蜂きさよ今間ゐくも行遭
て。知らぎ顔ゝて過ゝる。我容儀の変まるゆゝ爾ゐゝへよくも
窄ゝたゝ。正ゝく妻だも見忘れぬれば。敵ハ誰ゝ我を知るべき宿
志を遂るふ易ゝりと思ふふはけても妻子ゐる。滋くも貞義を
操るゐゝふ名告て今世の對面ゝ。至ふ名残も惜んゝと心躊
躇ゐ。運歩も自ら。後ふ引ゐぶちゝて。妻襲の妻子ゐと。
呼止ゝと去ゝりゝが忽ち思ひへもゝ。逢ぬ前ゞも恋憧て慕
るものふ對面せば。ゐゝ哀ゝきるゐを。ゐゝて雌ゝゝくゐり
ゞゝらば。謀を得ゝる今の身も敵の為ふ見露顕縲紲の身
とゐりゐせば。後悔もとも詮ゐゝん。嗚呼思ハゐゝば思をゞゝと。

十三

景清
形を変て
妻子
面体
十九

心を鬼ゐし行過しが恩愛の轟しまうとして。依ら惑ひ。さしと早くも去らむ。二華表まで来る處ふ。奴所ふ仮初ふ殿簀を囲ひ。亀ふ八卦を負しなる画ふ筆太ふト巫と書写なる。招鶴を撚げ出せり。景清偶ととれをえて。とハ奴地方ふハ珍しさ陰陽師のあるうの。我身のくへのるよりして。妻子ゑ未のるすまでをトせて関ぜと。殿簀なりたる種ふ入きび。前ふ八一人多く會ひ。我さ紀ふと石をとふ。いと置しきまで競へるを。ト者これをゐし鎮や爾爭ひゆひそよ。誰も前ふと思ひゆへん。ぶハゐなのぶ紀るぞうし。ととと思ひゆうのひ奴所ふ来るふ亟東をもて。次第を定めるふべしと。制をふ人。實爾ととと。漸うと静謐て。一人くくふ石をふ甲人ハ爾ふ。乙人ハ這般ふふと差をふ。こととそれふ。判断して説諭せば。とれ奇なるこハ妨なり。云も関へぬるゆどもをいうで爾知ゆるゆ。足下ハ指神子なるぞやと。嘆賞して立退つ。ゆうて景清ふ及びしうび。進ミ寄て云りなるハ某聊願度あり。奴るゆ果しし得べきや否。且更ふ妻子のるゆ。相別をてゆう音問ゐし。今恙ゐくて居るゆらん。これらのるゆさくトて。ゆゆきうしと閑ゆきび。陰陽師ハ遂一ふ聞濟して笠の程より。景清をためつをうしつ。熟〳〵と見て愕然と。驚きたるゆ〳〵ちしんとして俄ふ云ぞ。善を筆へ卦をたち。暫時考へ居たりしが。ゆうて攢眉め。今出る處の爻ハ。澤風大過なり。これハ乗木生花之卦。本末倶弱之象。譬て云ば冬の木ふ。花を咲がぞ〳〵ゆて。時来らぬを造化ふ逆。天理ふ乗ゆ咲く

なれば。遠ふ其本枯もあり。と是則ち大過ふして。自滅する意
あり。本末俱ふ弱るとハ。初交と上爻と。俱ふ陰爻ゐれば。棟の
本末繞かゞとハ。重荷をうけたる意あり。これを考ふる時ハ足下
たゞ單身ゐて。大望を企つとおゞくなり。細き棟の重ゆゑの荷を
負ふたるふ堪しくて。千辛万苦心を碎き。其志気を得ざるさふ。
果ハ命をびあん。免ても及びあき。望ゐとえくぐるさと又
妻子の身のえハ。前ふハいとく苦難ふ遭。今頃其親屬ふ。不圖
云て環會。今ハ其人ふ艱き。慈ゐくて居るのみて。足下を暴ひ
一日も。嘆かざる日ハおうゞし。彼と是とを棄ぜるふ足下ゞ思ひ命一
志氣を暫時歇時節を待ゝ宜らめと。説諭を声ナ三ふ。よく
似たりしゝば語まて。笠程をさし覗くふゞくへぐうあきナミあれば。

さてハナ三不昌も。阿古屋母子ふ環會。今艱ひて居るゐべしゝされば
契人妹を思ひ。我大望を支へおひて。阿古屋ふ逢さん謀ふや。今この
所ふ人居ゝとゞ。他の国へを恐る故。支を卦ふよしよそゐぐらつ諫め
夫ゆふあり。ゝ。いで我契志氣。何条歇ぐるやハあると。嘲笑て
云へるるい。大夫の心変するとハ。身ハ肉醤ふるとても。思ひ立る
企をゐど。飜もるやハある。生を貪り徒死をせば。濱山ふ生一草
木の。並ふ知らゝぞ行るゞとし。栄枯得失ゝ命ゐり。せめて名をのみ
遺をと。人身の幸をゞし。トの剋断辱し。因縁あゝば再會せん。
いざと云ふ。歩んとゝナ三声をけ援止め。爾ゞ思ふ足下のゝろ。
強ち支止むふゐゞ。易の表ふ顕ゝし。ゝをのみせしゝ尚も足下
ふ比ゝるゐ。ゝの望ハいゐゐらん。ゐふるゐ知祐ゞ。大望果し

得ぢと云ハ。近日反ハ聞及ぶ。平家の侍大将ハ悪七兵衛景清と
て。今並無雙の勇士あり。契人主家の仇ありとて。鎌倉殿を覘ハ
よし。某前ハ試ハ景清が卦をたてたりしハ。今日足下が卦と同じ。
熟〻是を按ずるハ。鎌倉殿を平家の仇と。思ハハ是誤なり。平
家執柄して廿余年一門廣く悪く。高位高官ハ昇ル。日本
六十六箇國を。三十余國ハ平家領せり。かゝる目出たき家なれハ。長
久ハ栄ゆべきを。たゞあきら流人ハあへなくも。後あきらでハ亡さるハ。豈
人力の故事ならん。云ハ故相國入道の權威ハあらし。鎌ハ長〻。
暴逆擅ハして。董卓梁冀ハ超過せしなれば。天人共ハ是を悪ミ。遂
ハ朝敵の名を蒙る。一門類を尋しと失ぬ。是則ち天誅なり。
曾て古人云をあり。夫恭儉ハ福の輿。微侈ハ禍の機なり。福與

ハ来るものハ。侵ぬ。康休あり。禍機を踏るものハ。忽ちして傾覆を
ル。平家の如きハ正ハ是。禍機を踏の類なるべし。今や平氏悪く。
亡び失ぬしその中ハ。獨六代御前のミ。文覚法師のあらけなふより
鎌倉殿ハ十七ひ。命助ルをハと聞く。景清是ハの道理。辨ぞ
して一途ハ。離を討んと窺ハよし。仕損じなば忽ちハ。六代御前
のわん身のうへ。いつで悪ぎ。契御公連失なば。平家の後ハ
永く絶なん。是をしも思義ぞと。思ハハ愚のいとうあり。退て熟思時
ハ天運ハ循環ぞと。云本文もあるなれハ。無念を堪へ時節を待ば
古内府重盛公の。血ハ存命しとき。上を敬ひ下を憐ミ。仁慈を行
ひろひたる。其德子孫ハ報ひ来て。六代御前世ハ出て栄あらん。
あるべし。とハ景清の上ぞうし。足下も同じき父なれば今云處を

比競べ。宿志を思ひ齷齪。時の至るを待まく。車あらんとて
やまく。みまく果さぬ支を知り。身心共に苦し。むハ。豈是智勇
の士といふん。尚委しきを聞んとあるに。我住家ハ大磯なり。尋て
おとゝ細やかに尚説聞まくまぐし。足下ハ何地に居るかと問ば
景清こゝろ笑ひ。我ハ賤しき職人にて。住所さく定めなき。浮浪の
身にてさぐるなり。足下目今図へるハ。景清とやらハ武士なり。我く
如きに比べぐらい。況ど。今其ぶ見識りて景清が為に足下に告べ。
元大夫たるものハ。寵も惡きも思ひこゝろ。其志氣を変ぬこと。男子
の中の男子なり。人に知らるゝの幼主の為の利害をよく
辨へて。做るのみならん。爾ば足下景清に對面なして懇に籘秦
張儀が辯をもて。其得失を説ともよも志氣ハ改むまじ。且

更に思ひをぐハ。頑石心の武士も。恩愛の情ハかゝるせまく。覚悟極
し身なぶるも。妻子のゝ心にかゝるさぐまひ。くく思ハるゝ。
心弱きまゝに。こぐと逢ぐに居るなぐし。足下もし彼妻と
子を知りまくるもあるべ。よく諫めて思ひ断し夫の目にかゝらぬ
諭して彼が忠義のわゞを全らしまひべ。是こそ上こと恵ハ
あゝじ。と云さしてこゝろ驚きとい我身に拘らぬよ。ふきるをも図へ
多くの隙を費さしぬ。ぎやて席を立退く。感謝を述て去行を
今暫時と十三が。おしこぐめんと思へども。人の不審るも憂しさ。
心あゝぎも別きく。且説惡七兵衛景清ハ十三と別まて思ふ。
我姿を窄しつゝを。人や知ると試ふ鶴岡に詣でしふ不意も
妻と子に問まく行逢たりしこゝろと。我なるるを知ぐもして過行

を見るべ誰か我を見知るものあらじ。斯てハ共穢倉を徘徊ともも見咎められじ。今の共身を我ありと知るものそハ十三のみ。彼卦の辞もて多くハ利害を説て復雛の思ひを断し我身の上の迷ふらんを思ふ心ぞハ悪けれども。そハ婦人女子の愛。義士の上ハ有るべからぞ。是ぞのみ辨へぬ十三ハ有ざるべども妹や姪の朝夕ハ我を暴ひ嘆くを見て。恐ぶふ有まりて云ふ〳〵我六代御前ハ誓たる。言語もあるハ其所ならん。平家の重代藤丸の御太刀までを盗まれ。何条思ひ止るべき十三是ハを知らざれば阿古屋ハ我身の光景を。語を知らまハ必定なり。爾ばハ共后妻や娘ハ。逢ふとあるべ我を知り。女心の一途ハ人目も恐ぶ思ふと。怨み嘆べ身のうを。人ハ知られて妨あるんハ胸苦しきを

あるいハ。いらあるもして十三ハ我胸中を告げ知らし。密しかるに共姿を妻子ハ語を知らさぬかう。ふしそんしのをとまるるハ流思ハ逢て恋ん時ハ。彼まる我を諫めあるよしるの趣を書写て贈らんハと。前の日尾張ハ別まし後木曽路ハして主見る。対面ふして約したる一件をるの首さし。鼠宿の怪異のるを。身を密したるハ至れまで。細やハ書記し。こまを懐ておき見つ。彼が栖ハ大磯と。自らをべ彼所ハ行。尋ねてひそかハ贈らんと。其夜蜜ハ大磯ハ踵を。其里人を尋ねて。共里より鶴岡へ日毎ハ出て占まれ。陰陽師の家ハ何所ハやと。懇ハ問けまべ。其人遥ハ指さしまて。あまハ見くなるさまの。一家を我陰陽師。栖ハてあるまと。四辻の外まの家をさして。細やハ教示ハ

ぜく。景清感謝〳〵其所ゝ踵ゝ家裡の炎景を窺ふに垣倒れ壁破れたるいと淺間なる家なれば。外より家裡の彷彿と窺ひ見らるさまなるゝ。夜ハ更きて月明く。あらいふ物すごくうまれば。壁の破れの隙より〳〵そさ〳〵覗き見るゝ人影ゝ〳〵。こハ門差やと思へども。夜遍ゝ一家ハ所より外ゝ絶てゝ〳〵。こそ十三ゝ阿古屋さへ。他ゝ出ていまゞ還らぬゝや。ふき時節なれば書簡を。ふゝ止めて還んと。思ひ〳〵ゝども。まて暫時〳〵。夜家主他人なゝ我夜忍ぶ形容を。他ゝ披露するゝ同じゝられば。夜家いよ〳〵十三ゞ。櫛かゝを見究めて。書簡を止めて去んりのをと。枝折戸をそと扣〳〵開き。さ〳〵〳〵て家裡ゝへ。懷ぐゝを窺ひ見るゝ。紙門立たる所あり。こいらある所ゝやと。その隙より〳〵覗くゝ

くハ佛壇とおぼ〳〵く。焚こと〳〵香の気もまぶ。ゆ〳〵きて紙燭を照し。熟〳〵看るゝ新なる神主ゝ。俗名五十奈と書写たれば。さそハ姑五十奈の老媼〳〵〳〵ゝ亡身とあ〳〵ゝるゝと。悍然とそ〳〵ゝるゝ。懷舊の愁を催し〳〵ゝ。あゝそ思ゝ夜。神主あ〳〵ゝ。十三阿古屋ゞ家ゝ疑ふべ〳〵ゝ。さるゝ。さても五十奈の老媼いゝる最期を遂るゝゝ。夜人も我たゝゝ。〳〵の憂ゝ逢々と思へゞ哀悼ゝゝ。そ心ゝ〳〵の回向をせんと。頓首ゝ〳〵。寥ゝゝ燈火かゝげ炎を燒鉢ゝち鳴ら〳〵念佛〳〵後懷中の一封を佛壇の中央ゝ居置て。姑〳〵霊あ〳〵び。某ゞ誠忠を察〳〵ゝ阿古屋我を慕ゞゝ。夢ゝゝ。体めゝ。今夜霊前ゝ〳〵〳〵一封の書ハ十三ゝ志ゝ〳〵ゝ。さ〳〵ゝ生る人ゝ云ゞ〳〵。愁ゝ述給〳〵。尚夫ゝ称名〳〵ゝ。ゝ〳〵ゝ。夜ゞ〳〵十三ハ弱念ゝ行て居〳〵ゝ。不意も景清ゝ鶴岡ゝ逢ゝ〳〵ゝ。人目の関ゝ遠き言語〳〵ゝ。袂を別ち〳〵ゝ。甚ゝ〳〵の躰たゝ。昔の容貌

に似もつかぬ窄姿の光景を妹阿古屋に告げんと。我家に還る時。もあれ。阿古屋も
今日鶴岡の段葛の邊にて。怪しき漢子を見たりしが。何とやらん景清に似つる如の
あしらひぶに其儘暮ひ行くほど人立ちの所にて見失ひ。いと怪訝思
まうり。兄さも其地所方に来たれば其ふりを逢て問て我夫が居を加へと十三を
問ふに。これは大磯へ飯らんとて今其所を去りぬるふりを云りの由。爾あらばとて途を
急き遂に我家の邊にて兄十三に追ひ着て互に面を合せぬ。十三は驚ひて扨
何地に行ぬ。若知ぬべきやうありて自今還て来たりしと。他に漏て勿れ。
家裡にて密に仕のんと云ふ阿古屋詞にて。奴家もかんぞふ仕ぬ。一体あつて此殿を
暴ひ。急ひで還たまへ。されども。ともかくもぬきうまたび。往還街上に云ぶ〳〵。
家に還たまへと。我家の門に立入らんとまうふに火影幽に閃ひて。
かの読經の声。その仕ぬ。何りのう空房に立入らんと不審つ驚

かの家裡をさ〳〵覗くに。一人の漢佛檀に對。読經〳〵と居たるまう。十三驚き阿古
屋に私語。人なき家を窺ひて。忍び入に白波の。緑の林まぶきに爾るものの。読
經まうに。何の縁故のあるまうん我まぶ入て問ひ明めん。扨こそ人丸に心をつけて
怪我さ〳〵あと身紹ひ〳〵て我家の裡に躍たへにぞ景清は驚きまうぶ燈火を消
闇きに紛れ脱れまうるを曲者かな〳〵と呼ぶけて逸足出して逐行を阿古屋は涙
雲中に兄人に若驅〳〵て怪我あるひぞ危鼠は猫を食とやら。やよのふく〳〵と呼止
むれど勢ひ強まし。遂に逐ふ去向を失ひ。斯ぎに隣伍輩。何ぞと
やらんと集會。阿古屋に問へば有〳〵と。語り給ふ〳〵。我き賊のあるその
うまいでや。その加勢を〳〵。捉て辛き目を見せんと。殿を募りて逐もあり。我さらしき
盗賊は。添て心〳〵やう〳〵と。止めて居るもあり。どうぐ〳〵ふりて立騒ぐ。兎角まうるも
時移。殿を募ひて行〳〵の。立戻てやう〳〵我〳〵猛勇を志し。追行れ

十三

人丸

主をたゞめ。盗賊めきゝ〜ものをとゞめいふ主ハ還てゝと。大汗試ひ問ひくるふ阿古屋ハさらなり〜残ア〜人。と訝アてこいいふ。何方をきて追くるゝ。今ふ還り来らとそ。易き心もなりしゞ。くまろて十三ハ。寛〜として還り来ゝ。阿古屋とれを見安堵〜走アて歩て十三ふ對ひ。扨〜何地ふ逐ものふぞ里の人〜加勢せんと。逐狂ものゝ。扨〜ものゝ。いそ盗賊を知るものゝ。空〜く還アてひつ〜〜評議ものゝ。ふ里人口〜ふ追行〜方を問くれゝ。十三回応くるかハ。彼盗賊本道を行ぞ。径を過り走行を。暴ひ追ふふ不圖も。俄ふ雲の月を覆ひ。暫時小闇〜ある紛ふ忽ち賊の去向を知ぞ見失ひ〜口惜さふ四方を捜索思ぞ。時を移ぞ〜ものゝ。再ひ盗賊をみることあ〜。今ハ〜ハ是まぞと。空〜く還りいふ。〜ものゝ。ふ人〜を煩ハ〜ぬぞ畏けと。〜や夜も更ていふ還りて歇ひ〜ものゝ。と感謝を述て里人を還ら〜ものゝ。ふ入りて歇ひ〜。却説這裡右大将頼朝公孫舎大倉郷ある。永福寺造営あゞと。

諸國ふ命て材木を召集めるふある。抑奥孫舎とハ海岸ふ添ひ〜地方あれば諸國ふり集る材木川を流れ海を還アて由比濱ふ寄〜ぞけ。夫より永福寺ふ運ふ。とふ甲斐國より出〜る。大きかの樺樹あり。丈ハさるでもなれども木理是珍らかれい本尊を安置まゞき。佛堂ふ造ゝ〜ものゝ。牛車ふ載〜て牽ア。由比濱より永福寺行途ふ滑川とて。さかの流れあり。川岸高く時より。彼木を載たる牛車。奥地方を過ア時。誤て車の片輪を川岸ふ落〜。載たり。牛飼ハ驚ひて。牛の鼻ぼらをとりて牽上んと。右ハ左ハ。大きかの木を載〜たる車の片輪を岸ふ落〜。なれば重く尼寄漸〜と川の方へ傾くゝ。ものゝ。牛も力ものゝ。ものゝ。今ハ川ふ落入んと。牛飼ハ患ひ問へて。声を上一人を呼び。助けよと叫びアる。里人ハ孫舎ものゝ。食ふ入りて運ぶ木を奥地方ものゝ。過失あ〜ぶ。後難脱るふ和ものゝ。らんと牛飼ア叫び声ふ。我も人の集會牛車ふ。ものゝ。をかけて。頻ふ牽て上んとれど。大般石のごくものゝ。上ものゝ。出〜も上らもものゝ。

落くるふ今ハ詮ちやうあくて殆雑義ふ却やびく。牛當時景清ハ永福寺造営の場ふ主入んとおもはれとも原来牛寺他人の。桑詣を止ム漫ふ人をへざるべ。景清その縁を求めて雑らんと思ふものゝ日毎永福寺ふ赴き。手便ふあくべきやあくと蟹ふこれを窺ひく。今日も既ふ牛所ふ来ぬ。寺の邊を徘徊。まのくふをらしくを。ものんきぞも其便宜を窺ざりしく心樂まもくて主戻ぬ。滑川を過る時。牛の川ふ落んとするを見あやと心驚きく我ふもあくべき走寄て車の轅ふをうけて。洩やと牽べこい悔しく。まべさくの大勢ぶ力を尽くして牽れども。牽ちもくてあくるを容易く上ふ牽あげくべ牛所ふ會る人こい牛光景をつて大ふ驚きこいくふ大勢ぶ力を拯て牽きくるふ些も動くぞあくるを一人の力をもて易らくふ牽上ふ人間ぞいよもあらじと吉を卷て感嘆も牛車ふさくそひくる。下司の漢子景清ぶ拳動をて感ぎるあぬ。進く寄てをくくるハ汝ハ是いくある人を目今牛を援つ。力量のあと感ぎるふ

たく。今と牛桟木を牛川ふ落くあくぶ。雑所ふくて揚ること。雑くべきを見下一人ふて桟木を川ふ落さむ牛さく恙あきをゆくく。我牛労を謝ぜもへあらくく。ゆくく住所を詳らふ徒ぶ笑くく拵と問ふて景清ふをつく完ふとあくく回応くるふこと思ひ名ぬ命名基ゆハ素よく駅くく。住所定めぶて所くふ雇ふひくのみて延頃い山城の國大津の里ふ雇ふれて牛飼とあくてゆひくる。今ハ牛孫給ふ繁栄の地とあれくと聞傳くをくくはれば。牛所ふ下ふて何あくと生営をあきべやと牛ゆどくく下ふゆひはれど。知る人あくて今日まそも。誰ふ雇ふるあくあく牛邊を徘徊くふ牛の心ふて我ふもあくべ牛ふ却ものくく。それ力量のあるふあくも牛の心を切くるをもその力を援るのこいくで其ぶ力あくん。そを誇ふ労くてあくぶ報ひを禀ぶきや周ちまくまくもよくべあき。牛ぶ力をゆくい奈何辛苦のくふあれ。雇ひて召もたくを見あべ深きふ思ふゆくと低頭あくて周ふ下司ハくち點頭さくい足下ハ孫給ふて生営

もんとて下さるゝふ。手便あくしと望を切る。心苦しく居りつるゆゑ。こゝ幸のるぞかし。
今永福寺ふ造営あり。職人雑人数多いとべ。我これを吹挙しそ。足下が切るゝ
をゝて人歩のうちふ雇ふゝめん。汝何をの切つるぞと問へば景清頭首しこゝ冥加者
金子。某何を切るゝといふ。おのくゝあるゝと賤が業ハ。何ぞれ厭ハゞ財をしてうひあ
こゝろあき事をそゝぐゝ。英雄恩ハ某が生涯忘ぬハゝと。おゝべの色を顔ふ顯し。
只顔あたのゝみのくゝれば下司ハ黠直て勇あれハ今より我と共ふいさ来まゝと伴ふ
景清ハ心得ふ。名圖も便宜を切て永福寺造営の人歩のうち入るゝハ。宿志を遂る
端あつと。ゝび勇ゝ殿ふ仕ま。永福寺へぞ急ぎけり。

景清外傳 松の操三編卷之一終